

平和を実現するキリスト者の歩み

西原美香子

元 NCCJ 幹事—平和・核問題/女性委員会担当

現日本 YWCA 業務執行理事(前日本 YWCA 総幹事)

1. はじめに

こんにちは、西原美香子と申します。私は、1998年4月～2006年7月までの約8年間、NCCJの平和核問題/女性委員会担当幹事として働き、現在日本YWCAの業務執行理事としてキリスト者の立場で平和の問題に取り組んでいます。

1999年の「平和を実現するキリスト者ネット」(以下、キリスト者平和ネット)と2002年の「平和をつくり出す宗教者ネット」(以下、宗教者ネット)の発足に携わった者の一人として、本日皆さんの前でお話させていただきます。

私は牧師ではありません。日本聖公会の信徒です。神学的なお話はできませんが、キリスト者として、女性として、母親として、またキリスト教を活動の基盤とする国際NGOのスタッフとして、1990年以降のキリスト者の平和の取り組みをお伝えします。明日から始まる広島での9条世界宗教者会議での協議にあたって、この報告が材料の一つとなれば幸いです。

2. 平和を実現する日本のキリスト者の歩み—1990年～現在

(1)新たな戦争前夜を迎えた日本

時は1990年に遡ります。「日本が新たな戦争前夜を迎えた」と市民たちが動き出しました。というのも、1990年8月2日のイラクによるクウェート侵攻をきっかけに、国連が多国籍軍の派遣を決定し、1991年1月17日にイラクを空爆して湾岸戦争が起こりました。その時の日本政府の動きはこうです。

1991年 PKO 協力法成立

1996年 日米安保協力指針(日米ガイドライン)の改正協議

1997年 「新ガイドライン」 日米両政府により合意

1998年 日米新ガイドライン関連法案が国会で審議

(周辺事態法案、自衛隊法改正法案、日米物品役務相互提供協定(ACSA)改正法案)

1999年 日米新ガイドライン関連法 成立

国旗・国歌法 成立

憲法調査会法 成立

ちなみにこのような情勢の中でも、10年足らずの間に日本の総理大臣は6回も替わっています。

(2)宗教者が対話によって市民をつなぐ

この頃、情勢に危機感をもつ市民たちが、連日国会前に集まり座り込みや抗議集会を開いていました。キリスト者を含め、宗教者も例外ではありません。1998 年 12 月、西早稲田の NCCJ の事務所より、NCCJ 総幹事名で電話帳に記されているすべての伝統宗教の本部に FAX で手紙を送信し続けたのです。「戦争につながる動きに宗教者として否の声をあげましょう。宗派・教派を超えて祈りの集会をもちませんか！」という内容です。今思うと、大胆で丁寧さを欠く唐突な動きだったかもしれませんが、その FAX を受け取ってすぐ、「やりましょう！」と応答くださったのは日本山妙法寺の僧侶でした。

1999 年 1 月 NCCJ が仏教者に呼びかけ、東京の豊島公会堂で「平和を求める宗教者のつどい」を開催。その集いを軸にして、その年の 3 月に今度は 800 人で国会を包囲し、戦争への道に宗教者として「否」の声をあげました。これがきっかけとなって、宗教者たちが大きく動き出します。NCCJ の大津健一（おおつけんいち）総幹事と日本山妙法寺の武田隆雄（たけだたかお）上人が、国会前に座っている市民団体や労働組合一つひとつに「一緒にやりましょう」と声をかけて歩きまわったのです。

当時国会前には、戦争につながる日本政府の動きに抗議して、大勢の市民や労働組合の人たちが連日座り込みを行っていました。それぞれが同様に危機感をいだいて抗議の座り込みを行っているにもかかわらず、そこにはイデオロギーという見えない隔ての壁が立ちはだかっていました。共産党系と社会党系の労働組合の幹部は、相容れない関係にありましたが、個々にあつまっていた市民は、一人では抗する力になりきれないもどかしさに包まれていたのです。しかし、この二人の宗教者の声かけによって事態は大きく動きます。個々の間にある隔ての壁が取り除かれていったのです。誰もが待ち望んでいたのです。日本の市民運動の歴史上、画期的な出来事でした。

(3) 「いのちを守る」という一致

1999 年 5 月 21 日、東京の明治公園を会場に開催された「ストップ戦争法！ 5・21 全国大集会」が実現します。この集会に参加するために全国各地から大型バスもでました。5 万人が集まりました。集会を呼びかけたのは「宗教者たちの『平和を求める』集い実行委員会」と「陸・海・空・港湾関係の労働組合 20 団体」でした。集会の議長団には、日本山妙法寺と日本 YWCA が入り、呼びかけ団体のあいさつに NCCJ 大津総幹事、集会宣言の朗読にキリスト教婦人矯風会、そして集会の司会進行を NCCJ 幹事であった西原が担いました。

立場や平和構築のアプローチが異なる様々なグループが共に大集会をつくり上げるには大きな困難を伴いましたが、一点一致で合意形成していくことにしたのです。その一致点は「いのちを守る」ということです。陸路・海路・空路の労働者たちは、戦争につながる輸送を行うことになれば、常に生命の危険にさらされます。その人たちの「いのちを守る」ことは労働組合にとって使命なのです。パイロット、客室乗務員、船員たちが制服を着てデモの先頭に立ちました。仏教者は、釈迦（しゃか）の教えの「殺すなかれ」を説き、戦争による殺戮を二度と許さないと訴えました。キリスト者は、侵略戦争に抗しきれなかった深い反省にも立つとともに、すべての生命は神によって創造されたものであり、なにびとも侵すことはできない。すべて尊厳の回復のために、私たちは祈りつつ行動すると語りました。

(4) 「平和を実現するキリスト者ネット」の発足

この大集会後、さらなる運動の展開のために平和を求めるキリスト者のネットワークをつくろうと、NCCJ がキリスト教諸教派・団体に働きかけ、結果、1999 年 10 月、平和を実現するキリスト者ネット（キリ

スト者平和ネット)が発足しました。当時の大津総幹事をはじめ、NCC 平和核問題委員会、靖国神社問題委員会が連携し、NCC に加盟する教派・団体の枠を越えて話し合いをもちました。当時の記録にはこのように記されています。

- ・ 私たちは、「剣を鋤に」とおっしゃるイエス・キリストの教えと生き様をどうみているのか？
- ・ 「武力で平和はつくれない」と確信をもって戦争国家づくりを阻もうとしているのか？
- ・ それとも、またもや状況に流されてしまうのか？
- ・ 事態はかなり進んでいる。私たちが明確な意思をもって行動しなければ飲み込まれる。
- ・ 非戦・不服従の意志を示そう！

キリスト者平和ネット発足の趣旨はこうでした。

- ・ 今、日本は新たな戦争前夜を迎えています。戦争協力を求められるために、あらゆる人権が脅かされています。

かつて日本がアジア・太平洋地域を武力侵略した時、教会もこれにすすんで協力しました。私たちは、平和の福音を宣べ伝えたイエスをキリスト＝救い主と信じる者として、自らの歴史の反省に立ち、日本は二度と他国の隣人に軍事的脅威を与えてはならないと決意しています。

- ・ 私たちは「戦争体制」づくりを看過することはできません。そのため、各地で平和実現の働きを担っている個人やグループとの情報交換や支え合い等のネットワークを通して、平和憲法を堅持し、すすんで武力を捨て、あらゆる戦争への協力を拒否します。
- ・ そして、弱い立場の人の視点から、アジア・太平洋地域の隣人と和解し、国際的な信頼の絆を築くことを目指します。

このキリスト者平和ネットの運営主体となったのは、NCCJ 加盟教派・団体、日本福音同盟社会委員会、日本キリスト教会、日本キリスト改革派教会、日本カトリック正義と平和協議会でした。これまでになく、幅広いキリスト者のエキュメニカルなネットワークとなったのでした。

(5) 祈りつつ行動すること

キリスト者平和ネットの活動には常に「祈り」があります。クリスマスには平和のメッセージをハンドベルの音に合わせて約 100 名が歌い、語り、銀座の大通りをキャロリングしています。日本の市民の間では、「クリスチャン」は教会の中で静かに祈っている人たちというイメージをもたれています。その「クリスチャン」たちが政治の動向に危機感をもって立ち上がり、行動していることを街ゆく人たちに知らせるという役割が初期のキリスト者平和ネットにあったと思います。銀座の買い物客も立ち止まって見ていました。これまでの「デモ」は男性中心で、拳を振りかざしたシュプレヒコールの怒濤がこだましたものだったからです。シスターも牧師も平和をつくりだそうと歌って歩いている。今の政治に異議を唱えている。それはどうしたことか？！と、道行く多くの人たちに立ち止まって考えてほしい、戦争へ向かう社会の動きに気づいてほしいという願いがありました。

宗教を超えた祈りの集いも教会や寺院で数多く行いました。仏教者は諸教派の経を唱えます。「南無阿弥陀仏」(なむあみだぶつ)もあれば「南無妙法蓮華経」(なんみょうほうれんげきょう)もあります。ムスリムはコーランを唱えて祈り、キリスト者は賛美歌を歌って「主の祈り」をささげました。互いの宗教は言葉や儀式こそ違いますが、いずれの祈りも「与えられたいのちへの感謝」と「いのちを創られたものへの畏敬」のように感じました。

(6) 子どもたちから示唆を得る—過去を変えるな！未来をつくろう！

2001 年、世界情勢はさらに悪化します。4 月に歴史を歪曲した日本の教科書採択問題、9 月にはニューヨークの同時多発「テロ」事件が起こり、日本ではそれを口実にテロ特措法ができます。11 月には米軍によるアフガニスタン攻撃。日本ではテロ特別措置法による海上自衛隊インド洋派兵がなし崩しでなされました。

日本の国会前には、韓国の当時国会議員だった金泳鎮(キムヨンジン)さんが、日本の歴史教科書の歪曲に抗議し、国会前で断食。続いて 8 月 15 日の敗戦記念日に靖国神社を公式参拝した首相に抗議して、韓国の李京海(イキョンヘ)さんが国会前の抗議の断食・座り込み。私たち日本のキリスト者も一緒に抗議の座り込みを続けました。

子どもたちもおとなに連れられて座り込みに参加する場面もありました。子どもたちの将来に関わる大変な事態に、おとな達が座り込んで抗議している姿をみて、子どもたちに時の証言者となってもりたいという思いからです。

ある日のこと、在日大韓基督教川崎教会の小学生と中学生たちがやって来ました。抗議の断食を続ける金泳鎮さんに出会った子どもたちは、思いをその場にあったノートに記したのです。「過去を変えるな！未来をつくろう！」と。この言葉は、その後多くのおとなたちを突き動かし続けています。今もそうです。日本が侵略と殺戮の過ちを再び繰り返すことなく、次世代に平和な世界を手渡す責任が、私たちにはあるのだと、痛感した出来事でした。

子どもたちも真実を知る権利があるし、感じ、考える能力がある。そのことを知った瞬間でもありました。その後 NCCJ と NCCK が共催して、小学 5～6 年生を対象に「日・韓・在日 子ども平和会議」を 3 回に亘って開催しましたが、きっかけはこの日の出来事が大きく影響しています。広島で行った第 1 回子ども平和会議でこんなことがありました。プログラム最終日の前夜、布団の中で子どもたちが片言の日本語・韓国語・英語に筆談を交えて会話していました。「もしも、韓国と日本がまた戦争したらどうしよう」と日本の子どもがつぶやくと、韓国の子どものように言いました。「大丈夫だよ。だってぼくたちチング(*韓国語で「友達」の意味)だもの」と。またこんなこともありました。広島のキリスト教社会館近くの銭湯に子どもたちと行った際、韓国語で話す子どもたちに気づき、地域の在日のハルモニたちが韓国語で「よく来たねえ」とみんなの髪を洗ってくれたのです。子どもたちは、広島の銭湯で韓国語が話せるおばあちゃんが数人いることに驚いていました。たとえその時、それが何故かわからなくても、将来彼ら・彼女らが歴史を知り、その日銭湯での経験を思い起こした時、記憶と記憶は線でつながり、面となって、平和をつくり出す大きな出来事になると確信します。

(7) 草の根のネットワークから発展

キリスト者平和ネット、宗教者ネットという2つのグループが、NCCJ を中心とするキリスト者のエキュメニカル運動からつくり出されました。この2つのネットワークがさまざまな市民グループの接着剤となっていきます。

2002 年、有事法制に警鐘をならすために意見広告を打ちました。その後の動きはダイジェストで見たいと思います。

[動画\(*キリスト者の動きを音楽と写真でつづった PPT。\)](#)

既にお気づきかもしれませんが、キリスト者平和ネットも宗教者ネットも、信仰者の草の根のネットワークです。諸宗教・教派・教団のトップたちのネットワークではありません。キリスト者平和ネットや宗教者ネットは、信徒・信者であれ、牧師・僧侶であれ、一人の信仰者として祈り、行動をもって世に証していくことができるものです。それは素晴らしい一面でもありますが、弱点もあります。

私たちは今一度ふりかえらなければなりません。キリスト者あるいは宗教者たちは、戦争へと向かう動きを阻止することができたのか。次世代に続く活動をつくり出したのか。平和とは何かというメッセージを教会や寺内外で語っていたのか。政治家にもメッセージを届けることができたのか。どうでしょうか。残念ながら国の政治を変えるような大きな力には成り得なかったかと私は思います。しかしながら、少なくともキリスト者をはじめ宗教者たちの中には、教会や寺院から外に出て祈り・行動し、隔ての壁を打ち壊して人びとを繋ぐ接着剤の役割を果たした人々がいた。そのアクションがなければ、日本の戦争へ向かう動きは瞬く間に進んでいたことでしょう。キリスト者平和ネットや宗教者ネットの決断と歩みは、戦争へと突き進むとする日本政府の動きを遅らせることはできたと言っても過言ではないでしょう。

もう一つ、これらの草の根の動きが、2005 年 4 月の諸宗教・諸教派・諸教団のトップ組織である「宗教者 9 条の和」の発足に繋がりました。そして、その後開催された 2007 年の第 1 回 9 条アジア宗教者会議に始まり、明日より広島で開催されます第 6 回 9 条世界宗教者会議へと発展したのです。今後は NCCJ が間に立って、草の根ネットワークとトップ組織のネットワークの動きを丁寧に分ち合い、連携をさらに強くしていただけたらと願います。

(8) 「非暴力抵抗運動」という文化

宗教者たちの存在によって「非暴力抵抗運動」という文化も市民グループに広まりました。「非暴力、不服従」を提唱しインドの独立運動を指揮したガンジー、アフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者として活動したキング牧師、沖縄で反基地運動を主導した阿波根昌鴻(あわごん しょうこう)さん、もちろんイエス・キリストの生きざまに倣って、キリスト者をはじめ宗教者たちが「非暴力抵抗運動」を実践しようと呼びかけてきました。各地で開催される市民集会では、非暴力を進めることを原則とし、参加者を誹謗中傷しないことを確認し合って開始ことが定着しています。

今一度私たちが確認しておかなければならない大事な点があります。それは、平和構築の活動は「非暴力抵抗」運動であることです。「非暴力・無抵抗」ではなく「非暴力抵抗」運動です。それは生半可な覚悟では貫くことができないことを、新基地建設を阻止するために行動する沖縄の辺野古や高江の人々が行動で示し続けていますし、韓国の運動からも多くを学びます。私たちは、いのちや尊厳を脅かす負の動きを確実に止め、「平和を実現した」という結果を出さなければなりません。キリスト者をはじめ宗教者の集いが「文化講演会」で終始してはなりません。

(9) キリスト者は「希望」を語る

良き結果とならないもどかしさと絶望感が渦巻く市民運動の中で、キリスト者が唱え続けているのは「希望」です。市民運動の中で、聖書の言葉を抽象的に解き明かすことではありません。「祈っています」という言葉に身を隠すことでもありません。現場に立ち、現実を直視し、ビジョンを描き、あきらめずに行動する姿ことが信仰の証しです。イエス・キリストが私たちの苦しみや痛みに関心し、解決への道へと導いてくださるという確信があるからこそ、私たちは苦しくても光をもとめて進み続けることができる。市民

運動の中で「希望」を語り続けることも、キリスト者の役割の一つであると考えます。

3. 今、なぜ 9 条なのか

(1) 9 条世界会議からの学び

ところで、今なぜ 9 条なのでしょう。

2008 年 5 月、千葉県の幕張メッセをメイン会場に市民による「9 条世界会議」が開催されました。この会議の呼びかけの冒頭はこのように記されています。

「アジア・太平洋戦争後、もう2度と戦争をしてはならないと、世界に対する「不戦の誓い」として憲法 9 条は生まれました。そして長年にわたり、日本とアジアの人々の信頼関係の礎となってきました。いま世界では、暴力と戦争の連鎖が進んでいます。イラク情勢は泥沼化し、中東の危機は続いています。アジアでは、朝鮮半島の核問題の解決が急がれています。「テロとの戦い」で、大国が軍事費を増やすなか、貧困は広がり、環境対策は遅れています。そんな中、世界で平和を求める人々は「9 条の考え方」に注目し始めました。日本国内で「改憲論」が高まる今だからこそ、世界の人々とともに 9 条の意味を考えたいと思います。」

「武力によらない平和を」、それが「9 条世界会議」のテーマでした。41 カ国 150 人以上の海外ゲストが集まり、定員 7000 人の会場には 3000 人以上が入りきれず、急遽会場前の広場を臨時会場としたほど熱気ある集まりでした。9 条を戦争放棄の観点だけでなく、非常に多角的に捉えることができたと思います。

私もこの会議の実行委員であり、YWCA として「核のない地球@9 条—子どもたちに伝えるワークショップ」を実施しました。この市民による「9 条世界会議」にはいくつかのキーワードがあったように思います。

- ・ 紛争を対話で解決すること
- ・ 軍事費を人々のために回すこと
- ・ 基地をなくして環境を守ること
- ・ 核のない平和なアジアをつくること
- ・ 一人ひとりを大切にする持続可能な社会をつくる

これらをキーワードとして、「9 条的考え方」を世界の平和に役立てていくことができる。私たちに何ができるのか話し合ったのがこの会議でした。第 9 条は短い条文です。しかしたった 2 項からなる条文には戦争放棄だけではなく、紛争の予防、人権の回復、持続可能な環境や経済の安定…などに世界各国の平和を愛する人たちが「希望」を見出すものであることを、私は「9 条世界会議」から学びました。

憲法第 9 条、それは「9 条的な考え方」という思想を構築するもの。まさに日本の宝であり、世界の宝だと実感しました。憲法第 9 条を守り、「9 条の考え方」を世界に広めることは、朝鮮半島の平和統一に向けて日本が貢献できることだと考えます。

残念ながら今、「宝」となりえていない現実があります。日本の市民は、日本の現安倍政権が目論む改憲の動きを阻止し、侵略戦争の歴史の反省に立ち、9 条の意味や価値を再確認する学校教育・市民教育を行って、9 条を本当の意味で「宝」とする。その決意をさらに強くします。

(2)キリスト者にとっての 9 条とは

私たちキリスト者にとっての 9 条とは何でしょう。私にとって 9 条は「祈り」です。9 条は、この地上に正義と平和、ゆるしといのちと愛をもたらすための、きわめて具体的な祈りであると考えます。9 条の条文に込められた「9 条的思考方」は、あらゆる暴力を否定するものです。すべての「死」をもたらすものに対して「NO！」を突きつけ、すべての「いのち」を愛しむものに「YES！」を宣言する。キリスト者にとっての 9 条は、聖書の教えをきわめて具体的に憲法に記したものだと思うのです。

9 条だけではありません。日本国憲法の理念には、聖書のみ言葉のメッセージが重なります。キリスト者として自らを絶対化せず、少数者の意見、声にならない声に耳を傾けてその尊厳を守り、愛しむこと。憲法のもつ立憲主義の思想に、私はイエス・キリストの生き方を見ます。

すべての人を個人として尊重することが究極的な目的として立憲主義に立ったこの憲法は、第 13 条に「すべての国民は、個人として尊重される」と記しています。そこには「人は皆同じ」と「人は皆違う」という二つの側面をもつと、法学館法律事務所の伊藤 真(いとう まこと) 弁護士は指摘しています。

「人は皆同じ」とは、人は誰でも生きていく価値があるということ。誰もが一人の人間として大切にされなければならないということ。この思想に立ったに日本国憲法は、社会のために一人の人を決して犠牲にしてはならないという考えを示しています。伊藤さんは、次のようなたとえでそれを説明しています。

10 人の凶悪犯が捕まったとして、その中で一人だけ無実のひとがいたとします。でも誰がそうなのかわからないという状況があったときどうするか。憲法はこのような場合、社会のために一人を犠牲にしてはいけないと考える。10 人の内 9 人の極悪犯を、世に出すことになったとしても、冤罪でつかまってしまった一人の犠牲を強いてはいけない。極端なはなし、憲法に立つならば、10 人を釈放する。

100 匹のヒツジをもつ羊飼いが、迷子になった 1 匹を探し回る聖書の物語が重なります。99 匹をその場に残しても、羊飼いはたった 1 匹のために力を尽くします。この聖書の物語と同じように、憲法は一人の人が大勢の社会のために犠牲になってはいけないと考えるのです。「すべての人は、個として尊重される」その精神は憲法に流れる思想なのです。

個として尊重されることで「人は皆同じ」です。同時に憲法は「人は皆違う」という側面をもちます。誰もが個々に違うことの豊かさを大事にし、かけがえのない個として尊重する。「あなたはあなたであり、この世の中にたった一人しかいない かけがえのない存在である」ことが、この憲法に流れる「個」の尊重の精神です。

キリスト者の視点で 9 条をもつ平和憲法にアプローチすると、これを守り、活かすことで、平和は実現できると確信し、そこに希望を見出します。

旧約聖書は申命記の 30 章 19 節の聖書のみ言葉を心に刻みます。

「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命をえるように」。

今を生きる私たちの生き方が、次の世代に平和な世界を手渡すことに繋がるようにと願ってやみません。